天草版金句集の出典について

福島邦道

天草版金句集の研究は、早く土井忠生博士[注一]の研究があり、ついで吉田澄夫博士[注二]により大成されたのである。なお、この書については亀井孝氏[注三]による峻厳な書評がある。戦後、新たに土井博士[注四]の「五常」の研究もなされている。ところで、各句の出典については、土井・吉田両博士の研究のほかには、ほとんど進められていないのであり、それらが定説として金句集の解題などにもそのまま採用されているのが現状である。私は年来この研究に従事し、その出典を探究しているが、なお探り得ないものも若干ある。ただ、従来の説については、そのまま諾い得ないものも多く、ここに今までの成果を公表し、大方の御叱正を得たいと考えるものである。以下、本文の引用にあたっては、上に算用数字を付してその金句の所在を示すとともに、ローマ字は翻字して記した。

一

天草版金句集の訓読語形には、現在の普通の読み方と異なるものがあると言われている。

88是非のな（声）は翼なうして飛び、損益の名は脚なうして走る。

92前車の覆すを見て、後車の戒を知る。

253英雄は国のこあし（幹）なり庶民は国の本なり。

これらの読み方を文明本節用集（雑字類書）によって検すると

是非之声（ナ）無レ翼飛損益之名無レ脚走　文選

前車覆（クツガヘス）後車之誡　漢書

英雄者国之幹（コウシンナリ）庶民者国之本　三略

とあり、金句集のも当時の読み方に従っていることがわかるのである。「覆す」という形については、「サントスの御作業」には

前車の cutçugayeru を見るについて（第二巻 二九一ページ）

とあり、「ぎやどぺかどる」にも

前車の覆るを見て後車の戒めとせざらんや（下巻「南蛮文集」四ページ）

とあり、キリシタン資料ではむしろ「覆る」という形の方が普通だったのである。「覆す」については、以前[注五]にも記したことがあるので参照されたい。

つぎに、金句集の本文にキリシタンの立場からの改定が加えられ

ていると言われている。

126鬼神は盈てるを虧いて謙るに益す。人道は盈てるを悪んじて謙を好んず。

この句について、

この本文の出典は易経の「天道虧盈而益謙云々」であるが、本集の本文では天道の語を避けて鬼神として居り、註解文において天道にしてゐるのである。これは天道が吉利支丹の用語として特別の意義を有するものであるために、故意に本文に改定を加へたと見られるのである。(「金句集の研究」一五二ページ)

とされている。しかし、文明本節用集に

鬼神害レ盈而福レ謙人道悪レ盈而好レ謙周易

とあり、管蠡抄にもある。したがって天草版金句集の編者は易経の「鬼神」とある句を参考にしていることが考えられるのである。

二

天草版金句集の出典研究において、もっともその影響が濃いと考えられるものに、本邦に流布していた金句集があげられる。本邦の金句集には諸写本があるが、それらの中で伊達家本には、吉田博士も後に指摘されたが、他の写本にないものが見える。

35薬の病を理むることを知つて、学の身を理むることを知らず。(抱朴子)

36孝は百行の本、衆善の始なり。(後漢書)

188徳を論じて官を授け、能を量つて爵を受く。(文選)

207鸚鵡よくもの言へども飛鳥を離れず、猩々よくもの言へども禽獣を離れず、人として礼なきはよくもの言ふと雖も、また禽獣の心を離れざるか。(礼記)

などは伊達家本にのみ見える。二〇七則は西海余滴集にも

古言にも鸚鵡能言とも飛鳥をはなれす、猩々能言とも禽獣をはなれす。故に父子妻に友とす。今人として礼なきは、飛鳥禽獣におなしといへり。(古典文庫　七七ページ)

とあり、文明本節用集にもあり、成句として行なわれていたと考えられる。

金句集の写本の中で、大東急記念文庫蔵金榜集は収載句数のもっとも多いものであるが、天草版と一致する句数はあまり多くはない。ともあれ、天草版の編者は、相当句数の多い、本邦の写本を参照したものと思われる。

ところで、金句集以前において多くの金句を集成した書が古くからある。(注六)平安時代には源為憲の世俗諺文があり、鎌倉時代には菅原為長の管蠡抄や玉函要文があり、(注七)くだって明文抄がある。これらの金句には、天草版金句集と一致するものが相当数あるのであって、天草版の編者が参照した本邦の金句集は、現存金句集より句数も多く、管蠡抄などに収載の金句を多く含む金句集ではなかったかと考えられるのである。天草版金句集の出典は、そのもとは漢籍にもとづくものではあるが、本邦の金句集からこれらを引用したのであり、一々原典によったとは考えられないのである。

文明本節用集に収載された金句に、天草版金句集の金句と一致するものが多いことも、文明本節用集の金句は、先行の金句を集成した書から取り入れたためであって、当時そういう書が盛行していたことが考えられよう。文明本節用集の金句には一々出典が注記してある。論語・三略などは直接原典によっているが、その他のものは

すべてが原典から直接引用したとは考えられないのである。同様に、天草版金句集の編者も、従来考えられていたように、原典をすべて机右において、それから抜粋したというのではなく、直接原典によったものは非常に少なかったのではないかと推定されるのである。

天草版の表題に

四書七書などのうちより抜き出し、金句集となすものなり。

とあるが、吉田博士も言われるように、四書の中からは論語、七書の中からは三略を使用しているのであって、問題はその外の漢籍である。これについて、古文真宝・貞観政要・孔子家語があげられているが、後の二書は除くべきである。

貞観政要の句として

59人の善悪は誠に近習に由れり、近習の間尤も慎むべし。

60人と相共に処る時んば自然に染み習ふ。

61人は堯舜にあらず、何ぞ事々によく善を尽さん

があげられている。しかし、五九則六〇則は管蠡抄や文明本節用集に見えるのである。六一則の出典として、貞観政要の

雖不及堯舜之明、庶免乎孫皓高緯之暴（中略）人之思慮有限、一人不可総知数職

があげられるが、これでは遠すぎる。六一則は古文真宝後集の与韓荊州書にある

且人非二堯舜一誰能尽レ善

によったものであり、古文真宝の出典は一則ふえることになる。

孔子家語の句として

84善人とともに居る時んば、芝蘭の家に入るが如く、久しうしてその香をきく。

95水至つて清き時んば魚無く、人至つて察なる時んば徒無し。

170その君を知らずんば、その使ゆるところを視よ。

171その人を知らずんば、その友を視よ。

があげられている。しかし、これらはすべて管蠡抄に見え、九五則一七〇則一七一則は金榜集に見える。ただここに一つの問題がある。それは

56歯を与うるにその角を欠く、翼をつくるにはその足を二つにす。

の出典として孔子家語の

四足者無羽翼、戴角者無上歯

があげられている。これに似た言い方は今鏡にも

羽あるものは前の脚なく、角あるものはかみの歯なき事に侍る

を（日本古典全書　一四三ページ）

とあり、直接孔子家語によったものではなく、当時の日本化した格言を採用したのではないかと思われる。

このように、管蠡抄や文明本節用集を重視する立場では、

85日月も曲穴に光を播すこと能はず。衝風も井底に波を揚ぐること能はず。（葛氏外篇）

115鼠をみるに皮あつて礼無し。人として礼なきは死せずして何かせん。（詩経）

172尊客の前には狗をだも叱らず。（礼記）

173三歳の学には三歳の師を択ぶには如かじ。（桓氏新論）

などの句も、両書に見えるのであって、直接括弧内の原典によったとは考えられないのである。また、

245小悪やまざる時んば大悪なる。

について、訓蒙要言故事（元禄七年）の

三略記――小悪不止大悪成

を引かれているが、今の三略には見えなくて、管蠡抄や文明本節用集にすでに見えているのである。また

263陰徳あれば必ず陽報あり。

について、淮南子があげられているが、管蠡抄に

世説曰有陰徳必有陽報

とあり、童子教にも

人而有陰徳必有陽報矣

とある。このように、今までの漢籍の出典のあげ方については是正すべきものが多く、直接よったと考えられるものは、論語・三略・古文真宝・黄山谷など数書に限定されてくるのである。黄山谷の詩句も

74百戦百勝不如一忍

のごときは、すでに金榜集に見える。したがってほかの黄山谷の詩句も直接採用したものか否か、問題が残るのである。

281得がたきは節に伏し、義に死する臣なり。

は出典不明句とされていたが、大漢和辞典（「節伏」）に漢書の句として

今以二四海之大一曾無二伏レ節死レ誼之臣一

とある。しかし、直接漢書から引用したとは思われないのであり、しばらく疑を存しておく。

もとは漢籍にでている金句であっても、日本化しているもののあることであるが、

48忠言耳に逆ひ、良薬口に苦し。

213思ひ内にあれば色外にあらはる。

の二句について、土井博士は

例へば、「良薬苦口而利於病忠言逆耳而利於行」（孔子家語）は我に於いて「良薬苦口忠言逆耳」（義経腰越状、謡曲楠露等）とし、更に句を前後して用ゐ、又「思有於内必形於外」（孟子）は「必」を色に代へて言つた（謡曲熊野、松風等）ので、ロドリゲスの日本大文典にも単に格言と標して、（中略）と引き、天草版金句集でも格言として通行せる方を採つてゐる。（「吉利支丹文献考」一九三ページ）

と言われている。四八則は管蠡抄には

史記曰忠言逆耳利於行、良薬苦口利於病

とあるが、さらに天草版に近い形として、句雙葛藤集に

忠言逆レ耳良薬苦レ口（三之四　八〇ウ）

とあり、天草版の編者はこれを採ったものである。この格言が通行していたことは、「猫のさうし」（日本古典文学大系「御伽草子」三〇〇ページ）にも見える。二一三則も句雙葛藤集に

思在レ内色顕レ外（一之二　四三オ）

とあり、いずれも特別に日本化した形を採ったわけではない。むしろほかに日本化した句がある。

43忠臣二君に仕へず、貞女両夫にまみえず。

これは金句集に

賢人不仕二君貞女不見二夫（伊達家本）

忠臣不仕二君貞女不改二夫（金榜集）

などとあるが、いずれもぴったり一致しない。保元物語には

賢臣二君に仕ず、貞女両夫にまみえず（日本古典文学大系　一六一ページ）

とあり、曽我物語にも

賢臣二君につかへず、貞女両夫にまみえず（日本古典文学大系　二二一ページ）

とあり、その頭注に

史記田単伝に「忠臣不レ事二君一、貞女不レ更二夫一」とあり、明文抄二・平家物語九などに引かれる。保元物語下・義経記二などには、ここと同じ形で出ている。（中略）賢臣は、流布本によると、「けんじん」とあり、賢人にあたるか。

とある。日葡辞書には

Qenxin jicunni tçucayezu.

とある。このように、天草版金句集の編者は、本邦の金句集を参考にしながらも、一方本邦に行われた形をも参考にしていたと思われるのである。

218餓ゑて糟糠を択ばず。

これも本邦の金句集の

餓不レ暇択レ食

を出典にしているが、ぴったりと一致しない。明文抄には

飢者甘二糟糠一

とあり、天草版金句集は両者をミックスした形である。この金句は史記抄に

カツヨウトハ、イカナル糟糠テマリ、甘露ノ様ニ思フ者ナリ。

（「史記桃源抄の研究一」　四六四ページ）

とあり、「カツヨウ」は、鈴木博氏によれば京都府立図書館本には「カツエテハ」とあるとのことである。

232千里の道も一歩より始る。

については、

老子、下篇、第二十七章――千里行始於足下。

五灯会元、巻十五――欲行千里一歩為始。

かやうに数種の原拠があった結果、本則の「千里の道も一歩より始る」の如き日本化した形を生じたものと思はれる。（「金句集の研究」二二八ページ）

と言われている。曽我物語には

千里の行は、一歩よりはじまるといふ老子のおしへも（日本古典文学大系　一六三ページ）

とあり、虎明本能狂言の入間川に

千里の道も一歩よりおこる

とあり、天草版金句集はこの両者をミックスした形となっている。

187大国を治むるは小魚を烹るが如くす。

の出典として、

老子、下篇、第二十三章――治大国若烹小鮮

があげられているが、この老子の句は文明本節用集に見え、さかのぼって、明文抄にも見える。しかし、いずれも天草版とはぴったり一致しない。キリシタンと同時代の人である林羅山の金句を集めた書に庖言抄（元和六年）があるが、その中にこの老子の句をあげ、

是ハ国ヲ治ルニ余リ事多紛シケレハ其国草臥ツカレテ返テ乱ル、也小鮮ハ小魚也小魚ヲ烹ニ喩フ（六ウ）

とあり、当時の人は「小鮮」を「小魚」と同じに用いていたことがわかるのである。ところで庖言抄の「国ヲ治ルニ云々」と似た句が

天草版金句集の出典不明句の

26国を治むるに煩しき時んば、下乱る、身を修むるに煩しき時んば、精気散じ去る。

の前半の部分である。また、これにすこし似た句に、後のものであるが、悔草の

老子も。国をおさむるに。余事多きは。民くたびれて。却てみだれなん。小魚を煎に。いろう事しげゝれば。砕る物とたとへたり。（近世文学未刊本叢書　一六一ページ）

という句がある。二六則は多分に日本化したものを採ったと思われるが、正確な出典はつかめないのである。

同じく出典不明句として、

193多財はその守心を失し、多学はきくところに惑ふ。

がある。後のものであるが、竹斎狂歌物語に

きみはかの大聖老子の言葉をしろしめされずや。……又たからをゝきときは身をまもるにうとし（岩波文庫　二〇二ページ）

とあるのに前半は似ていて、「守心」は「守身」とすべきである。浮世物語の

老子の曰く、欲多ければ身を損ひ、宝多ければ身を煩はすと言へり。（日本古典文学大系　三二七ページ）

もすこし似ている。

三

句雙紙は禅林の佳句を集めた書であり、版本写本が数種あり[注八]、天草版金句集にはこれらと一致するものが多く見出せる。天草版は流布本と一致するもの約四十則、異本と一致するもの約三十則と言われている。ただ、

270一言已に出づれば駟馬も追ひ難し。

は、流布本になくて異本にのみ見られるとしているが、流布本にも

一言已出駟馬難レ追（元禄六年版　下六五ウ）

とある。また、

235笑裡に刀を隠し、泥中に針あり。

の出典として、

句双紙――笑裡蔵刀

虚堂和尚語録、巻四――笑中有刀

があげられているが、句雙葛藤集によれば、

咲裡蔵レ鋒泥中有レ刺（三之四　七四オ）

とあり、流布本には

咲中有レ刀（上　二一オ）

とあるが、恐らく葛藤集などを参考にしているものと思われる。

123去路一身は葉より軽し。

は、句雙紙の

去国一身軽似葉

が出典とされるが、禅林集句（貞享五年）によれば、

聯頌去国作二去路一

とあり、天草版はこのような形を採用したのである。

このように、句雙紙の諸本を見くらべることによって、より一致する形が見出されるのである。

233衆星多しと雖も一月には如かじ。

について、当時このような成句のあることを推定され、

淮南子に「百星之明不如一月之光」とあり、五灯会元に「星多

不当月」とある。また曽我物語巻十に「禽鳥百を数ふると云へども一鶴に如かず、数星相連ると云へども一月に如かず」などとあつて少くとも数種の形があつたのである。天草版はその一を採用したものと思はれる。（「金句集の研究」一〇四ページ）

と言われている。しかしながら、句雙葛藤集には

衆星雖レ多不レ如二一月一（三之四　七八オ）

とあり、成句を推定する要はないのである。

次に、五灯会元を出典とする句として

164理は高声によらず。

237衆口調へがたし。

があげられている。もっとも、二三七則については、句雙紙の存在を予想されているが、句雙葛藤集に

元来有理不高声（一之二　五九オ）

衆口難調（三之四　七六オ）

とある。ただ、五灯会元にあるという

210恩を知る者は少く、恩をきる者は多し。

のみは、いまだ句雙紙の諸本に見出すことができないのである。

98用ゆる時んば鼠も虎となり、用いざる時んば虎も鼠となる。

の出典として句雙紙の

用則為レ虎不レ用則鼠

があげられている。これと同じような句の

用レ之則為レ虎　不レ用則為レ鼠

は、管蠡抄や文明本節用集（「コ」の項）にも見え、漢書を出典としている。「虎も鼠となる」という形は「ささめごと」に

用ゐる時は鼠も虎のごとくなり、用ゐざる世には虎も鼠なり（日本古典文学大系　一九七ページ）

とあり、天草版は当時の言いならわされた形を採ったとも言えよう。

ちなみに、句雙紙を出典とする句で、

271一人虚を伝ゆれば、万人実と伝ふ。

273病に応じて方を施す。

の二句がハビアンの妙貞問答に見える。

一人虚ヲ伝レバ万人ハ実ト伝ル世ノ習ヒニテ（日本古典全集二五ページ）

病ニヨツテ方ヲ施スノ人非レバ（日本古典全集　七ページ）

天草版平家物語を抄したハビアンは金句集をも見ていたと思われ、まことに興味深いものがあるのである。なお、これらの「実と」（jitto）は連声した形となっている。

四

国書の中で、もっとも多く引用されているのは太平記であるが、従来太平記から直接引用したとされているものの中に、金句を集成した書に見えるものがある。

8君子その家に居て、その言を出すこと善なる時んば、千里の外みなこれに応ず。

119窮鼠却つて猫を噛み、闘雀人を懼れず。

124君臣を視るに土芥の如くにする時んば、臣君を視るに寇讐の如くす。

180先にする時んば人を制す。後にする時んば人に制せられる。

181それ天子は四海を以て家とす。

八則は明文抄四に、一一九則は明文抄四や管蠡抄五に、一二四則

は伊達家本金句集に、一八〇則は明文抄五・管蠡抄二・伊達家本金句集に、一八一則は世俗諺文・明文抄・管蠡抄一・伊達家本金句集にそれぞれ見える。したがってこれらの金句の出典は太平記であると一方的に決めてかかることはできない。ただ、太平記以外の書に見えていても、太平記から採ったと考えた方がよい金句がある。

7忠臣を尋ぬるに必ず孝子の門に出づ。

の出典として、

太平記、巻三十二、直冬吉野殿合体事（後漢書、韋彪伝）——求忠臣必於孝子之門

があげられているが、これは太平記の文のままでなく、「求」は流布本（日本古典文学大系　太平記三　二二三ページ）に「尋ネテ」、西源院本（九一五ページ）や神田本（五五三ページ）に「尋ヌルニ」とあり、天草版の編者は太平記の或る一本を参照したにちがいない。

152謙に居て仁恩を施し、己を責めて礼儀にとどまる。これを以て高しと雖も危からず、盈てりと雖も溢れず。

の出典は、

巻一、後醍醐天皇御治世事——謙ニ居テ仁恩ヲ施シ己ヲ責テ礼儀ヲ正ス是ヲ以テ高シト云トモ危カラス盈テリト云トモ溢レスであるが、天草版のように「礼儀ニ止ル」とあるのは神田本（二ページ）である。

21行路の難きこと海にしもあらず、山にしもあらず、ただ人の心の反覆の間にあり。

の出典は

巻十一、筑紫合戦事（古文真宝前集、白楽天、太行路）——行路難、不在水、不在山、只在人情反覆間。

であるが、流布本（日本古典文学大系　太平記一　三七六ページ）は「不レ在レ山兮、不レ在レ水」とあり、参考太平記（三三三ページ）によれば、「不レ在レ水不レ在レ山」の順になっていて、天草版の形に近いのである。さらに、流布本ではつかめない句がある。それは

166隣国に賢者あれば、敵国の憂（うれい）なり。

の出典として韓詩外伝があげられている。ロドリゲスの日本大文典にもこの句があり、土井博士の訳註本（五四四ページ）も「韓氏外伝から出た句」とされている。しかし、この句は明文抄にあるし、西源院本に

隣国ニ有ニ賢者一敵国之憂（ウレイ）也（八九ページ）

とあり、また、平治物語（日本古典文学大系　四五五ページ）にも似たような句がある。ところで、天草版金句集の編者が、本邦のいかなる太平記によったか、ある一写本によったとすればそれは何本にもっとも近いか、いまだ十分な断定は下せないのである。私はロドリゲスの日本大文典に引用された太平記本文の研究もしているが、ロドリゲスのよった太平記も流布本とは異なったものではあるが、それが何本であるか、なお探究中である。

太平記に見えるものであるが、当時のほかの文学作品にも見える句がある。

125麒麟は角に肉あって猛き形を現さず、潜竜は三冬に蟄して一陽来復の天を待つ。

は、「呉越軍事」（日本古典文学大系　太平記一　一四一ページ）によるものであるが、曽我物語の「呉越のたたかいの事」（日本古典文学大系　二二六ページ）にも見える。

247世上の毀誉は善悪にあらず、人間の用捨は貧福にあり。

も、太平記によるものであるが、「ささめごと」には

人間毀誉非二善悪一、世上用捨在二貧福一

のように、順序が逆になって出ている。

次の二句は問題である。

39こころは恩のために使ひ、命は義によって軽し。

の出典として

太平記、巻八、巻三十等（後漢書、朱暉伝孫穆）――情為恩使、命縁義軽。

があげられているが、太平記にはこのとおりの文は見られない。むしろ巻十一にある

専諸・荊卿ガ心ハ恩ノ為ニ仕ハレ、侯生・予士ガ命ハ義ニ依テ軽シ（日本古典文学大系　太平記一　三七四ページ）

がもっとも近い。しかもこれはそのまま和漢朗詠集下に見えるものである。この句は当時広く流布したもので、たとえば、屋島軍にもめいは儀に依てかろし命は恩の為につかはす（幸若舞曲集　三九七ページ）

などとある。また、

148蝸牛の角の上に何事をか争ふ。

の出典も

巻二十七、上杉畠山流罪死刑事（白氏文集、対酒）――蝸牛角上争何事

とされているが、太平記には、

蝸牛ノ角ノ上三千界（日本古典文学大系　太平記三　七八ページ）

とあり、金句集の形はやはり和漢朗詠集下に見えるのである。この句も当時流布していたもので、文明本節用集（「カタツブリ」）をはじめ、曽我物語や謡曲頼政にも見える。以上二句のほか、和漢朗詠集からの引用は一〇七則にも見える。日本耶蘇会は和漢朗詠集上を出版したが、金句集に引用されている朗詠集の句はすべて下巻からである。キリシタンは和漢朗詠集には特別の愛着を感じていたと思われるのである。

国書では十七条憲法と童子教からの引用がある。後になってであるが、キリシタンの人々が十七条憲法をよく見たことは、十七条憲法には徳失鏡が付載されているものがあり、この徳失鏡が、最近発見されたエヴォラ屏風文書（注九）（一八二ページ）に見えるからである。童子教からの引用は、ロドリゲスの日本大文典にもあり、実語教とともにキリシタンにはよく知られていたのである。

国書の中で、平家物語との関係については、

80呉王剣客を好めば百姓に瘢瘡多し、楚王細腰を好めば宮中餓死多し。

158綸言汗の如し、出でて二たび帰らず。

のように、平家物語にあって金句集に見えないものは、あるいは平家物語を参考にしたものであるかもしれないと言われているが、そうではない。

八〇則の後漢書の句は非常に著名なもので、管蠡抄・玉函要文・明文抄をはじめ、文明本節用集（「コ」の項）に見えるからである。また、一五八則は本邦の金句集では、

号令如汗、汗出而不反者也

とあるが、句雙葛藤集に

綸言如レ汗、出再不レ返（三之四　七六ウ）

とあるし、古辞書では下学集をはじめ文明本節用集などに見える。天草版金句集は平家物語とは直接の関係はない。

五

以上の考察により、天草版金句集の典拠となった書は、従来考えられていたものより大幅に減ってくるのである。漢籍では、特定書は論語・三略・古文真宝など数書に限定されてくるし、禅句はほとんど句双紙に含められる。国書では、特定書は太平記・十七条憲法・童子教のほか和漢朗詠集を加えたいのである。そして、典拠のもっとも中心となったものは、現存金句集よりも、なお一層天草版金句集と一致する金句を集成した書があり、それを利用したのではないかと考えられるのである。

天草版金句集の出典研究は、金句集の訓法と漢籍や仏典の訓法と比較することによって開発される面があろうかと思われるが、私の研究はそこまでは及んでいない。今後、その方面の専門家の御意見をうかがいたいと思っている。最近、私どもは「天草版金句集語彙索引稿」（東京大学国語研究室）および「天草版金句集本文及索引」（白帝社）の二つの「索引」を持つことができたが、「索引」の本文そのものについて、出典考証がよくなされていないため、誤った本文と認定されるものも若干あるのである。天草版金句集の研究には、出典が先行しなければならないというのが私の持論であり、ここに出典不明のものを数句残しつつもあえて公表にふみきった次第である。

注

一、土井忠生　天草版金句集考（「京都大学国文学会二十五周年記念論文集」（昭和九年十一月、改訂して「吉利支丹文献考」（昭和三八年一月）に再収）

二、吉田澄夫　天草版金句集の研究（昭和一三年一〇月）

三、亀井孝　書評（国語と国文学一六巻三号　昭和一四年三月）

四、土井忠生　天草版金句集附載の五常について（国語学一九輯　昭二九年一二月、加筆して「吉利支丹文献考」に再収）

五、福島邦道　書評（国語学五四集　昭和三八年九月）

六、川瀬一馬　中世における金言集について（青山学院女子短期大学紀要三輯　昭和二九年一一月）

七、高橋貞一　玉函要文について（国語国文二〇巻五号　昭和二六年七月）

八、川瀬一馬　句雙紙考（「日本書誌学之研究」所収）

九、海老沢有道　松田毅一　エヴォラ屏風文書の研究（昭和三八年一一月）

——実践女子大学助教授——